
心の在処

ニッペマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の在処

【Nコード】

N1780BA

【作者名】

ニッペマン

【あらすじ】

物語はバーレンシュタインという小さな町から始まる。この町にはシュタイン城という城があり、そこには【レオン】という若き王子がいて、国の為、民の為に、常に最前で活動していて休む間もなく働いていた。そんな中、今朝も早くから国王ディランに呼び出されたのであった。

マモノ

シュタイン城 王の間

レオン「父上、ただいま参りました」

国王「レオンよ、お前を呼んだのは他でもない、封印の洞窟へ向かってもらいたい」

レオン「それは構いませんが。理由を教えてくださいか？」

国王「うむ、よかるう。実はな、封印の洞窟には【マモノ】が封印されておる」

レオン「マモノとは？」

国王「マモノとは、人々の心に巢食う悪しき心。シュタイン家のモノは、代々マモノの封印を守る役目を担っている」

レオン「そんな役目があったのですか？」
国王「うむ。お前に封印の洞窟へ向かってもらうのは、マモノの事で気になる事があるからだ」

レオン「気になる事ですか？」

国王「うむ。マモノが封印されてから今年で1000年。そろそろ封印が解ける頃なのだ」

レオン「なんと・・・。それではこんな悠長に話をしてる場合ではありません。早速向かいます」

国王「そう焦らなくてもよい」

レオン「しかし！」

国王「話は最後まで聞きなさい」

レオン「申し訳ありません・・・」

国王「封印の洞窟に入るには、この【心の鍵】が必要だ」

そう言うと、レオンに鍵を渡す。

レオン「確かに、お預かりしました」

国王「それとな、洞窟には心の剣というモノが安置されておるのだが。もしも、剣が光を放っていたのなら抜いてくるのだ」

レオン「わかりました」

国王「うむ。それでは任せたぞ」

心の鍵を受け取ったレオンは、王の間を後にし、封印の洞窟へ向かう準備をする。

シュタイン城 レオンの部屋

レオン「一応、これも持っていった方がいいかな」

コンコンコン、

レオンが荷物を整理していると、ドアがノックされる。

レオン「開いてるよ」

ガチャ、ギィー。

ドアを開けて入って来たのは、背中に槍を背負い、左手に大きな盾を持ち、銀色の鎧に身を包んだ騎士風の青年だった。

騎士風の青年「よお、レオン。封印の洞窟に行くんだってな？」

レオン「ジークか。もう聞付けたのか？」

どうやら騎士風の青年の名はジークと言っらしい。

ジーク「俺の情報網をナメるなよ？」

レオン「お前は警備より、諜報活動が向いてるんじゃないか？」

ジーク「冗談言つてないで、質問に答えろよ」

レオン「これから行く所だ」

ジーク「やっぱりな。お前が俺に何も言わない時は、決まって面白そうなる時だ」

レオン「遊びに行くわけじゃないんだぞ？」

ジーク「それくらいわかってるさ。俺は王子の警護で仕方なくついて行くだけだ」

レオン「はぁ・・・、わかったよ。お前は一度言い出したら聞かないからな」

ジーク「ハハハ、さすがは親友だな」

レオン「荷物はこんなもんでいいか」

ジーク「オーライ、行こうぜ」

荷物の整理が済んだレオンは、ジークと共に封印の洞窟を目指す。

封印の洞窟

洞窟に辿り着くと、扉の前で兵士が見張りをしていた。

兵士「これはレオン様、如何なされましたか？」

レオン「父上の命により、封印の状態を調べにきた」

兵士「了解しました。それはそうと、なぜジークと一緒に？」

レオン「ジークには、俺の警護で来てもらっている」

ジーク「フフフ、そういう事なのだよ」

兵士「・・・。まあいいでしょう、お通り下さい」

洞窟の扉の前に立つと、鍵穴に心の鍵を差し込む。

すると、しばらく使われていなかったせいか、重く鈍い音を立てて扉が開いていく。

ジーク「ヒュー」
レオン「入るぞ」

洞窟の中へ入っていく二人。
松明で辺りを照らしながら、慎重に通路を進むと、開けた場所に辿り着く。

封印の洞窟 封印の間

レオン「ここが封印の間か」
ジーク「なんもねえな」
レオン「そりゃ、宝物庫じゃないからな」
ジーク「おい、剣が刺さってるぜ」

封印の間には階段があり、その先には台座があつて、そこには一本の剣が刺さっていた。

レオン「父上が言っていた心の剣とはあれの事か」
ジーク「近づいてみようぜ」

2人は階段を上り、台座へと近づいていく。

ジーク「それで、何しにきたんだ？」
レオン「剣が光を放っていれば抜け、との事だ」

階段を上り終えた二人の目に映ったのは、目映ゆい光を放っている剣の姿だった。

ジーク「ギンギンに光ってるぞ」

レオン「これは・・・、抜くしかないな」
ジーク「なあなあ〜」

不適な笑みを浮かべながら、レオンに話しかけるジーク。

レオン「ダメだぞ」

ジーク「まだなんも言っていないだろ！」

レオン「お前が抜くって言うんだろ？」

ジーク「ツチ、バレたか」

レオン「どうしても、って言うなら抜かせてやらん事もないが」

ジーク「マジかよー！？俺にやらせてくれよ〜」

レオン「フハハハ、いいぞ」

ジーク「やったぜ」

ジークはニヤニヤしながら台座の前に立つ。

ジーク「いくぞー！」

剣の柄の部分を手で握ると、全力で引き上げる。

ジーク「ぬをおおおおおおー！！」

全力で引き抜こうとするが、剣を抜く前にジークの腰が抜けてしま
う。

ジーク「はあ・・・はあ・・・。な、なんでだ・・・」

レオン「差詰め、王家のモノにしか抜けないとかそんな事だろっ」

ジーク「先に言えよ・・・」

レオン「言ったら面白くないだろ？」

ジーク「おまえなー！」

レオン「フハハハ、そう怒るな」

ジーク「あゝ、疲れて怒る気にもなれん・・・」

レオン「今度は俺がやるう」

そう言うと、今度はレオンが台座の前に立つ。

レオン「何が起こるのか・・・」

剣の柄を握り、引き抜いた途端、剣の中から禍々しい気を放つ黒いモノが溢れ出す。

???「パオオオオン!!ヨクモフウインシテクレタナ!!ユルサ
ンゾウ!!ユルサンゾオオオウ!!」

???「ツラカッタ・・・クルシカッタ・・・」

???「マタハタラクノカ・・・メンドクセーナ」

???「ホントチョームカツク マジアリエナインデスケド」

???「セカイヲ、キョウフノドンゾコニ、オトシテヤリマシヨウ」

???「コノセカイオレノモノ、ゼンブオレノモノ」

ジーク「お、おい!なんだよこれ!?!」

レオン「マモノが復活したのか!?!」

二人は剣の中から次々と溢れ出すマモノを、ただ見ている事しかできなかつた。

???「スベテハマボロシ・・・、イツワリノヘイワ・・・」

???「ハラヘッタナー!ハラヘッタナー!!」

???「グスツグスツ・・・、ナンデアタシガコンナメ・・・」

???「ウフフフフ、オトコヲアサリニイカナイト」

???「オギヤー!オギヤー!!」

「????」「オロカナニンゲンヨ、フウインヲトイタコトヲホメテヤルゾ」

解き放たれたマモノ達は、洞窟の外に向かって消えていく。

レオン「この事を父上に報告しなければ」

ジーク「よっしゃ帰ろうぜ」

レオン「この剣は持っていくか」

マモノが復活した事実を伝える為、シュタイン城に戻るのであった。

シュタイン城 王の間

レオン「父上、ただいま戻りました」

国王「うむ。どうであったか？」

レオン「剣が光を放っていたので引き抜いたところ、マモノと思われるモノが復活してしまいました」

国王「そうか……。わかった下がっていいぞ」

レオン「それだけですか？」

国王「何が言いたい？」

レオン「復活したマモノはどうなさるのですか!？」

国王「我らの手に負えるものではない」

レオン「それでは、放っておけと？」

国王「うむ。それしかあるまい」

レオン「わかりました……。失礼します」

レオンは部屋を出て行き自分の部屋へと向かう。

それからしばらくすると、国王が大声で衛兵を呼び始める。

国王「衛兵！衛兵はおらぬか！」

兵士「お呼びでしようか？」

国王「レオンを捕らえよ」

兵士「は？」

国王「聞こえなかったか？レオンを捕らえよ」

兵士「いくら国王様の命令とはいえ、理由も無しに王子を捕らえる訳には……」

国王「理由ならある。奴は王家の宝である心の鍵を勝手に持ち出した」

国王「それだけならまだしも、あろう事がマモノの封印を解いてしまったのだ」

兵士「封印を解いてしまったのですか!？」

国王「うむ。いくら王子とはいえ、許されるものではない」

兵士「わかりました。すぐに兵士を集めます」

兵士は部屋を飛び出し、仲間の兵士を集めに行く。

シュタイン城 レオンの部屋

その頃、レオンはマモノについて部屋で考えていた。

レオン「父上は何を考えておられるのだ……」

レオン「王家のモノの務めを放棄なされるおつもりなのか……」

そんな事を考え込んでいると、突然ドアが勢いよく開かれる。

ギーッ！バタン！

ジーク「おい！こんな所でボーッとしてる場合じゃないぜ」

レオン「どうした？」

ジーク「どうした？、じゃねえよ。衛兵がお前を捕まえる為に集結してるぞ」

レオン「衛兵が？どういう事だ？」

ジーク「そんな事知るか。とにかくここにいたら捕まるぞ」

レオン「父上に理由を聞いてくる」

ジーク「お、おい！まてよ」

国王から話を聞くため部屋を飛び出していくレオン。
ジークはその後を慌てて追いかける。

シュタイン城 王の間

レオン「父上！」

ジーク「レオン待ってって！」

国王「来たな反逆者共め」

ジーク「共、って俺もかよ」

レオン「父上、何をおっしゃっているのですか？」

国王「マモノの封印を解いた罪は重い、死をもって償うのだ」

国王と話していると、準備を終えた衛兵達がやってくる。

ジーク「逃げ道を塞がれちまったな」

レオン「父上！どういう事なのですか！」

国王「貴様に話す事などない」

レオン「なっ！」

衛兵「王子……。信じたくはありませんが、これも命令です。大人しく捕まってください」

レオン「・・・」

ジーク「レオン、行けるか？」

レオン「ああ、問題ない」

国王「お前たち、何をやる気だ？」

ジーク「こうするのさ！」

ガシャーン！

ジークは盾を構え、部屋の窓に向かって飛び込んで行き、すかさずレオンも後を追う。

国王「おのれ……。衛兵！早く追いかけるのだ！」

衛兵「ハッ！」

二人を追って、急いで外に向かう衛兵達。

シュタイン城 中庭

ジーク「いててて」

レオン「ジーク、大丈夫か？」

ジーク「ノープロブレムだ」

レオン「お前まで巻き込んでしまつてすまないな」

ジーク「何言つてんだよ、困つた時こそ親友を頼れよ」

レオン「フハハハ！そうだな」

衛兵「あつちにいたぞー！」

ジーク「おつと見つかったか。早いとこ逃げようぜ」

レオン「ああ、そうしよう」

出口を目指し、全力で逃げる二人

ジーク「んでよ、どこに逃げるよ？」

レオン「あまり気は乗らないが、リリイに助けを求める」

ジーク「ハハハ！リリイか、そりゃいい」

レオン「はぁ……。俺にとっては笑い事じゃない……」

なにか訳がありそうなレオンであったが、こんな状況では警沢を言
つていられず、

嫌々ながらもリリイに助けを求めるのであった。

第一話 完

マモノ（後書き）

虹の彼方とはまた違ったファンタジー世界をお楽しみ下さい。

クインシーンの姫（前書き）

衛兵に追われる身となった二人は、リリィに助けを求めべく街道を走っていた。

クインシーンの姫

街道

ジーク「はあはあ・・・。ここまで来れば平気だろ」
レオン「そうも言ってもらえないようだ」

衛兵「むわあああああてえええええい!!」

休憩する暇も無く、衛兵が追いかけてくる。

ジーク「ぬわああああ!!もうしつけれよ!!」
レオン「もうすぐクインシーンが見えてくるはずだ」

衛兵から全力で逃げる二人。

ジーク「ゼーハーゼーハー」
レオン「王子の警護ともあるうものがだらしないぞ」
ジーク「よ、鎧が重いんだよ!」
レオン「脱げよ」
ジーク「この鎧は騎士の魂なんだよ!」
レオン「そんな事知るか」
ジーク「おまえな!薄情だな!」
レオン「ジーク、見えてきたぞ」
ジーク「おっ?やっとか」

ようやくクインシーンの門前に到着すると、見張りの兵士に呼び止められる。

兵士「その二人、止まりなさい」

レオン「私はレオンハルト」シユタインだ。ここを通してもらえないか？」

兵士「これはレオン様！失礼致しました、どうぞお通りください」

レオン「すまないな。ついでに一つ頼みがある」

兵士「なんでしょうか？」

レオン「これからシユタイン城の兵士の格好をした奴らが来ると思うが」

レオン「奴らはただの盗賊だ、絶対に通してはならない」

兵士「ハッ！承知しました」

兵士にそう頼むと、二人は町に入っていく。

クインシーン

ジーク「はあく、やっと一息つける」

レオン「心の準備もあるし、城に行く前に少し休むか」

ジーク「へへへ、そうこなくっちゃな。あそこに飯屋があるぜ」

レオン「別に腹は減ってないが」

ジーク「いいからいいから」

ジークに連れられ、近くの店に入っていく。

店員「いらつしやーせー」

ジーク「二人ね」

店員「あーい、二名様ごあんなーい」

テンションの高い店員に案内され、席に座る二人。

店員「注文が決まったら呼んでね」

ジーク「どれにしようかな」

レオン「俺は決まった」

ジーク「はえーなおい」

レオン「お前はテリヤキセットで良いだろ」

ジーク「嫌だ、絶対嫌だ」

レオン「わがままだな」

10分後

レオン「そろそろ決めろ」

ジーク「うーん」

レオン「もう店員呼ぶぞ」

ジーク「おいバカ！まだ決まってねえよ」

テーブルに置いてあったベルを鳴らす。

リンリンリンリン！

店員「決まった？」

レオン「ざるそば二人前」

店員「はい、すぐもってくるね」

店員は厨房に注文を伝えに行く。

ジーク「二人前ってもしかして・・・」

レオン「お前が遅いのが悪い」

ジーク「ぐぬぬ」

3分も経たない内に、料理が運ばれてくる。

店員「おまた〜」

ジーク「はえーな!」

店員「ざるそば二人前です」

レオン「ご苦労」

店員「ごゆっくりどうぞ」

料理をテーブルに並べ終わると、店員はその場を去っていく。

二人「ずるるるるるるるるるる!」

レオン「うまいな」

ジーク「うん、うまいな」

二人は黙々とそばを食べ進め、辺りにはそばをすすする音だけが響き渡る。

そんな状態がしばらく続くと、唐突にジークが口を開く。

ジーク「ひひいにあうのあひはひふりははあ」

レオン「飲み込んでから喋れ」

ジーク「ゴクン」

ジーク「リリイに会うのは久しぶりだなあ」

レオン「あまり会いたくはないがな」

ジーク「お前も罪な奴だよな」

レオン「なにがだ?」

ジーク「リリイは曲り形にも姫だぜ? 外見もかわいいっちゃかわいいし」

レオン「姫だとか外見だとか、そんなものに価値は無い」

ジーク「ならよ、何に価値があるんだ?」

レオン「心だ」

ジーク「ブーーーーッ!」

レオンの率直なセリフに思わずソバを吹き出す。

レオン「汚いな」

ジーク「ハハハハハハ！」

レオン「なにがおかしい？」

ジーク「よくもそんな恥ずかしいセリフが言えたもんだな」

レオン「思った事を言ったまでだ」

ジーク「それが恥ずかしいって言ってるんだよ」

レオン「そういうモノか・・・」

ジーク「まっ、気持ちはわかるけどな」

そんな話をしながら食事を終わると、ある事に気づく。

ジーク「ふう〜、食った食った」

レオン「ところでジーク、金は持っているのか？」

ジーク「いんや〜、いきなり城飛び出してきちやったからな、サイフ持ってきてないぞ」

レオン「フハハハ！気が合うな俺もだ」

ジーク「ハハハハ、はあ！？」

レオン「どうするかな」

ジーク「兵士から逃げ切ったのに、食い逃げして捕まるとかシャレにならんぞ」

レオン「ジーク・・・、ここはお前の鎧を担保にしてくれ」

ジーク「ダメだダメだダメだ！」

レオン「役に立たん奴だな」

ジーク「ぐぬぬ」

レオン「仕方ない、俺が交渉してくる」

レオンは店員に交渉しに向かう。

レオン「君、すこし話があるんだが」

店員「なに〜？」

レオン「実はな・・・、ごによごによ」

店員「ああ、そういうことね。いいよ、立て替えといてあげる」

レオン「すまないな」

無事に交渉を成立させて、ジークのもとへ戻る。

ジーク「よお、どうだった？」

レオン「問題ない」

ジーク「さすがだな。なんて言っただけ？」

レオン「ジークの鎧を担保にするから金を立て替えてくれ、ってな」

ジーク「・・・」

レオン「なにやってる、いくぞ」

ジーク「ばかやろー!!」

レオン「元はと言えば、お前が店に誘ったのが原因だぞ？」

ジーク「それとこれとは話が別だろ〜」

レオン「お前も騎士なら潔く諦めろ」

ジーク「ぐぬぬ」

ジークは泣く泣く鎧を脱いで店員に預けると、二人は店の外に出る。

ジーク「はあ・・・」

レオン「落ち込んでる暇はないぞ、早く金を作って取り戻さないと
な」

ジーク「そうだな・・・、そうだよな！」

一瞬で立ち直ったジークと共にクインシーン城に向かうと、城の前にいた兵士が二人を呼び止める。

兵士「その二人、止まりなさい」

レオン「私はレオンハルト〓シユタインだ。ロバート王にお会いしたい」

兵士「これはレオン様！失礼致しました」

兵士「しかし、いくらレオン様でも、予定の無いモノをいきなり会わせる訳には・・・」

レオン「確かにその通りだな。それならリリイを呼んで貰えないか？」

兵士「それくらいなら構いませんが」

レオン「頼む」

兵士「では、少々お待ちください」

兵士は城の中へリリイを呼びに行き、しばらくすると派手なドレスを着た少女を連れて戻ってくる。

リリイ「レオン！」

ジーク「うひゃー、でたー」

リリイ「もう！レオンったら全然会いに来てくれないんですもの」

レオン「それはすまなかった」

ジーク「よお、久しぶり」

リリイ「なんだ、ジークもいらしたの」

ジーク「ひでえー」

リリイ「それでえー、わたくしに会いに来てくれたの？」

レオン「いや、ロバート王に」

リリイ「お父様に？まあいいですわ。参りましょう」

ジーク「ヒソヒソ・・・（ちょっとは女らしくなったんじゃないか？）」

レオン「ヒソヒソ・・・（それはどうかな）」

リリイ「二人共なにやっていますの！早く行きましょう」

兵士「リリイ様！勝手な事をされては困ります」
リリイ「おだまり！」

容赦なく兵士をムチで打つ。

兵士「ヒイイイ！！」

リリイ「わたくしに意見するなど、許されませんことよ！」
兵士「ハハア！申し訳ありません」

兵士は土下座して謝る。

リリイ「さあ参りましょう」

レオン「ああ、そうだな」

ジーク「（全然変わってなかった・・・）」

こうしてリリイの力添えにより、国王ロバートに謁見できる事となった。

クインシーン城 王の間

リリイ「お父様、レオンがいらっしやっただわよ」

ジーク「俺もいるぞー」

ロバート「なあにい〜？」

レオン「お久しぶりでございます」

ロバート「おおー！二人ともよく来たな！」

レオン「突然の訪問、申し訳ありません」

ロバート「構わん構わん」

レオン「ロバート王にご相談したい事がありました」

ロバート「うむ、申してみよ」

レオン「実はかくかくしかじかで」

レオンはバーレンシュタインで起きた事の一部始終を話した。

ロバート「ふうむ、話はわかった。マモノが世に解き放たれたとなれば一大事だな」

レオン「そこで、私が王家のモノとして、マモノを封じる旅に出ようと思うのです」

ロバート「良く言った！それでこそ俺の見込んだ男だ！」

レオン「旅をするにあたって、ロバート王にお願いがございます」

ロバート「申してみよ」

レオン「正門には我が城の兵士が待ち伏せていると思われるので、裏門を通らせて頂きたい」

ロバート「そんな事なら容易いぞ」

レオン「それと、町で異変が起きていないか調べて頂きたい」

ロバート「衛兵！」

衛兵「ハッ！」

ロバート「裏門を開けておいてやれ。それから、町に異変が起きていないか調べてくるように」

衛兵「了解しました！」

レオン「ありがとうございます！」

ロバート「うむうむ」

レオン「それでは我々はこれで・・・」

ロバート「まてまて、マモノ退治をするのなら教えておく事がある」

レオン「なんでしょうか？」

ロバート「心の鍵と心の剣についてだ」

レオン「なにかご存知なのですか？」

ロバート「うむ、心の鍵は元々は我が城の宝だからな」

レオン「そうでしたか」

ロバート「話というのは他でもない、使い方についてだ」

レオンは真剣な表情で話しに耳を傾ける。

ロバート「まずは鍵についてだが。心の鍵とは、人の精神世界に入る為の道具である」

レオン「精神世界？」

ロバート「うむ、人間誰もが心の中に自分の世界を持っている」

ジーク「おいおい、人の心に入れる道具なんてヤバいんじゃないか？」

ロバート「もつともな意見だな。しかし、いきなり鍵を使っても入れる訳ではない」

ジーク「どういう事だ？」

ロバート「心の扉が出現していなければ、鍵は使用できない」

レオン「心の扉とは？」

ロバート「心の扉とは精神世界と現実世界を繋ぐ門。扉を出現させる方法は二つある」

ジーク「いよつ、待ってました」

ロバート「その1：相手を動揺させる　その2：相手の信頼を得て心を開かせる」

レオン「ふむ……。おい、ジーク」

ジーク「ん？」

レオン「お前、小さい頃にリリーのパンツ盗んだよな」

ジーク「なななな、なにいつてんだよ!!!」

リリー「ジーク！あなたって人は！」

ジーク「いやいやいや、盗んでない！盗んでない！」

ジークがわかりやすい動揺をしたその時、胸の辺りに白い光が表れた。

レオン「（これが心の扉か・・・）」
レオン「ジーク、ご苦労だった。ロバート王の言うとおり扉は表れた」

ジーク「てめえー！俺を実験に使いやがったなー！」

レオン「フハハハ、すまんすまん」

リリイ「でも、わたくしには見えませんでしたわよ？」

ロバート「うむ、鍵の所有者にしか見えないのだ」

レオン「面白いな」

ジーク「俺をおもちやにするなよ・・・」

レオン「（次は後者の方法を試してみるか）」

レオン「リリイ、俺に心を開いてくれないか？」

リリイ「喜んで」

レオン「（白く光っているな・・・）」

レオン「ありがとう。扉は確認できた」

ロバート「心の鍵について私知っている事はこれくらいだが、まだ秘密があるかもしれん」

レオン「はい、旅の途中で色々調べてみます」

ロバート「次は心の剣についてだが、心の剣とはマモノを封印するための道具」

ロバート「マモノを再び封じるには、鍵を使って精神世界に入り、心の剣でマモノにトドメを刺すのだ」

レオン「なるほど」

ロバート「そして、心の剣を扱えるのは王家の血を引く心正しきモノだけである」

ジーク「やっぱ王家の人間だけなんだな」

ロバート「うむ、剣についてはこれくらいしかわからんが、まだ隠された能力はあるだろう」

レオン「心しておきます」

ロバート「以上で私の話は終わりだ。引き止めて悪かったな」
レオン「いえ、ありがとうございます」

リリイ「さてさて、話が終わった所で行きましょうか」

ジーク「ん？なにいつてんだ？」

リリイ「わたくしもお供しますわよ」

レオン「・・・」

ジーク「おいまで、なに勝手に決めてんだよ」

リリイ「あら？なにか文句がおありかしら？」

ジーク「いやいや、ロバート王が許さないだろ」

ロバート「構わん構わん、行ってきなさい」

リリイ「これで決まりね」

ジーク「こんな危険な旅に姫を行かせていいのかよー」

ロバート「一国の王女たるもの、旅の一つや二つしなくてどうするか」

リリイ「お父様はわかってらっしゃいますわね」

ジーク「レオンもなんか言ってるやれよ」

レオン「・・・」

ジーク「はぁ・・・、ダメだこりゃ」

マモノ退治の旅に無理矢理ついて来る事になったリリイ。

新たな仲間を加えた一行は、城の外に出る。

クインシーン

城の外に出てみると、調査を終えた衛兵が待っていた。

衛兵「ご報告致します。町人に聞き込みをした所、特に異変は確認

できませんでした」

レオン「そうか、ご苦労だった」

衛兵「ハッ！それでは私はこれで」

リリイ「これでこの町に用はなくなりましたわね」

レオン「いや、まだ一つやり残した事があつてな」

リリイ「なんですか？」

レオン「そば屋に金を返さないといけないんだ」

リリイ「お金？」

レオン「実はな、そばの代金が払えなかった為に、ジークの鎧を担保にして金を立て替えてもらつてるんだ」

リリイ「なるほど、だからジークが上半身裸なのね」

ジーク「てへっ」

レオン「だから、金を貸して貰えないか？」

リリイ「レオンの頼みなら喜んで」

リリイを連れてそば屋に向かい、店員に金を渡して無事に鎧を取り戻した。

ジーク「やつほー、俺の鎧」

リリイ「ジーク、わたくしを一生崇め奉りなさい」

ジーク「やだねー、鎧が戻ればお前のムチも怖くないぜ」

リリイ「ムキー！」

レオン「リリイ、怒るとかわいい顔が台無しだぞ」

リリイ「まあ！レオンったら・・・／＼／＼」

ジーク「アホやってないで、次の町に行こうぜ」

レオン「裏門の先は確か海に繋がっていたな」

リリイ「ええ、サンシャインという町があつて、そこには観光名所のサンビーチがありますわ」

ジーク「（水着ギャル・・・。デュフフフ）」

リリイ「ジーク、はしたないわよ」

ジーク「な、なんの事だよ」

リリイ「いやらしい事でも考えていたんでしょっ？」

ジーク「フフフ、残念でした」

レオン「扉が表れているぞ」

ジーク「ぐぬぬ！」

こうして、マモノ退治をする事になった一行は、常夏の町サンシヤインへ向かうのであった。

第二話 完

おっさんとジーク（前書き）

クインシーを出発した三人は、常夏の町サンシャインを目指して街道を歩いていた。

おっさんとジーク

海沿いの街道

ジーク「ヒュー、海が見えるぜ」

レオン「潮風が心地良いな」

リリイ「レオン、後で泳ぎにいきましょうよ」

レオン「遊びに来てるわけじゃないんだぞ」

リリイ「もう！少しくらい良いでしょ！」

レオン「ダメだ」

リリイ「むー！」

ジーク「まあまあ、そう堅い事言うなよ。マモノはビーチにいる！俺の勘がそう告げる！」

リリイ「ジークの言うとおりですわ」

レオン「ダメだ」

ジーク「ぐぬぬ」

リリイ「町が見えてきましたわよ」

長い事街道を歩き、ようやくサンシャインに到着する。

サンシャイン

ジーク「うっひょー、水着ギャル！」

レオン「ここからは情報集めの為に別行動するぞ」

ジーク「オーライ、俺は女の子達に話を聞いてくるぜ！」

猛スピードで海へ向かうジーク。

レオン「集合場所を聞いてから行けよ……」

リリイ「わたくしはレオンと一緒に行動しますわ」

レオン「そうだな」

レオンとリリイは二人で町を探索する事になった。

リリイ「レオン、あそこのお店になにかありそうですわよ」
レオン「入ってみるか」

リリイに連れられ服屋に入る。

リリイ「レオン、この服どう？」

レオン「かわいいな」

リリイ「それじゃこれは？」

レオン「かわいいよ」

リリイ「じゃあじゃあ、これは？」

レオン「かわいいぞ」

リリイ「キヤ、困っちゃった」

レオン「（ジーク、助けてくれ・・・）」

その頃、ジークはビーチでナンパをしていた。

サンビーチ

ジーク「そこの君！俺とデートしない？」

ギャル「キヤ、変態！」

ジーク「逃げる事ないだろうに」

数分後。

ジーク「そこのお姉さん、俺とデートしない？」

ギャル「キヤ、変態！」

ジーク「うん、なにが問題なんだろうな」

おっさん「その格好じゃないのかね」

ジーク「言われてみれば、砂浜で鎧着てたらおかしいか」

ジーク「てか、おっさん誰だ？」

おっさん「おれかあ？おれはこのビーチの管理人だ」

ジーク「ふえ〜」

おっさん「お前こそ誰だ？」

ジーク「おれかあ？おれは騎士だ」

おっさん「こんなご時世に騎士とは珍しいな」

ジーク「そうだろそうだろ、ラストナイトと言っても過言ではないな」

おっさん「そのラストナイトがなんでこんな所にきたんだあ？」

ジーク「そりやもう話せば長くなるんだがな」

おっさん「20文字以内にまとめてくれ」

ジーク「そうだな、マモノを退治しに来た」

おっさん「マモノお？」

ジーク「そうなんだよ、おっさんなんか知らないか？」

おっさん「しらねえなあ」

ジーク「そうだよな、おっさんだもんな」

おっさん「おっさん今、少し傷ついたな」

ジーク「悪い悪い。ところでおっさん、カキ氷奢ってくれよ」

おっさん「なに味がいいんだ？」

ジーク「そりやもうメロン」

おっさん「おっさんもなあ、メロン好きなんだ」

ジーク「だろだろー？」

おっさんにカキ氷を奢ってもらうジーク。

おっさん「ほらよ」

ジーク「あざーす」

二人「シャリシャリシャリ、パクパク、キーン！」

ジーク「ビーチでかき氷なんて最高だぜえ」

おっさん「そうだなあ」

ジーク「ところでおっさん。管理人って言ってたけどよ、ただボーツとしてるだけなのか？」

おっさん「いやそれがなあ、前は違ったんだけどなあ、最近やる気が出なくてなあ」

ジーク「ふえ〜」

おっさん「なんなんだろうなあ、歳なのかなあ」

ジーク「おっさん何歳？」

おっさん「58」

ジーク「ヒュー、35くらいに見えるぜ」

おっさん「そうかあ？」

ジーク「ああ、イカしてるぜ」
おっさん「そう言われると、なんだかやる気が出てくるぞあ」

こんな世間話をして目的を忘れているジーク。
その頃、レオンとリリーの二人は……。

サンシャイン

レオン「リレイ、そろそろジークを探しに行こう」

リレイ「えー、もうちょっと買い物しましょうよ」

レオン「しかし、そろそろ日が暮れてしまっしな」

リレイ「もうそんな時間ですか？」

レオン「ああ、ジークが迷子になったら困るだろ？」

リレイ「そうだったら、二人つきりで旅ができますわね」

レオン「……（一筋縄ではいかないな……）」

リレイ「レオン？どうなさったの？」

レオン「リリイ、海辺の夕焼けを見に行こう」
リリイ「まあ！ロマンチックですわね」
レオン「そうだろうそうだろう」

上手くりリイを釣ったレオンは、ジークがいると予想しているビーチに向かった。

サンビーチ

ビーチに到着した二人が最初に見たモノは、夕焼けでも海でもなく、おっさんとジークの姿だった。

ジーク「そうか、おっさんも大変だったんだなあ」

おっさん「そうなんだよ、わかってくれるか・・・」

ジーク「ああ、わかるとも。俺も仲間にこき使われてるんだ」

おっさん「そうかそうか、お前も大変だなあ」

レオン「ジーク、なにやってるんだ？」

ジーク「おお、レオン。お前にも紹介するよ、この人はビーチ管理人のおっさん」

おっさん「やあやあ、ラストナイトから話は聞いているよ」

レオン「どうも（このおっさん、胸が光っている・・・。だが、光の色が黒いぞ・・・）」

レオン「ジーク、ちょっと来てくれ」

ジーク「ん？なんだ？」

少し離れた場所へジークを連れて行く。

レオン「あのおっさん、胸に黒い光が出ているんだ」
ジーク「なに!？」

レオン「もしかしたらマモノが巢食っているのかもしれん」
ジーク「そーいや、おっさんが最近やる気がでない、って言ったな」

レオン「当たり前か・・・」

ジーク「よーし、俺がおっさんに話をつけてくるぜ」

おっさんのもとへ戻る二人。

ジーク「おっさん！」

おっさん「どうしたあ？」

ジーク「俺の探してるマモノってのがさ、おっさんの心の中にあるみたいなんだ」

おっさん「またまたあ、おっさん騙されないよ」

ジーク「いやいや、本当なんだって。おっさん最近調子が悪いんだろ？」

おっさん「まあたしかになあ」

ジーク「マモノってのが心に入ると、そうなっちまうんだよ多分」

おっさん「そうなのかあ」

ジーク「だが安心していいぜ！俺たちがそのマモノをぶちのめしてやる」

おっさん「心の中にいるんだろあ？どうやってぶちのめすんだあ？」

ジーク「へっへっへ、おっさんちよっと目を瞑ってみな」

おっさん「こっかあ？」

ジーク「ヒソヒソ・・・（レオン、今だ）」

レオン「ヒソヒソ・・・（でかしたぞ）」

おっさんが目を閉じている間に心の鍵を使う。

すると、辺りが光に包まれ三人を飲み込んでいく。

レオン「ここが精神世界か」

ジーク「げえ、なんだよここ。ごみ溜めじゃねえか」
リリイ「汚いですわ」

心の扉を抜けた先には、悪臭漂うゴミ捨て場の様な場所が広がっていた。

ジーク「おっさんの心の中をこんなにしゃがって！絶対にゆるせねえ」

レオン「そうだな、マモノを見つけるとするか」

リリイ「さっさと倒して、早く帰りましょう」

ゴミ捨て場の中を探索していると、遠くから大きな音が聴こえて来る。

???「グゴゴゴゴゴ」

ジーク「なんか音がするぞ」

リリイ「イビキかしら?」

レオン「行ってみるぞ」

イビキの聴こえる方へ行ってみると、そこには巨大なハッピーターンみたいな形の生き物がいた

ジーク「うわあ、でけえー」

レオン「こいつを倒すのは、骨が折れそうだな」

リリイ「変な生き物ですわね」

???「グゴゴゴゴゴ」

レオン「寝てるようだし、サクッと切って終わらせるか」

マモノに近寄り、剣で切ろうとしたその時、突然寝返りを打ち始める。

レオン「なに!?!」

ジーク「危ないぞ避ける!」

リリイ「キヤー!」

三人は危機一髪の所で回避する事に成功したが、ゴミの中に突っ込んでしまう。

レオン「二人とも大丈夫か?」

リリイ「大丈夫じゃありませんわ・・・」

ジーク「クツセー!」

???「グゴゴゴゴゴ」

ジーク「くっそー!頭にきたぜ」

ジークは持っていた槍をマモノめがけて投げつける。

ズシュ!

???「イデエエエエエエ!!!」

ジーク「よっしゃ、ざまあないぜ」

???「ダレダオマエラア!!!」

レオン「お前こそ誰だ?」

急情「メンドクセーケド、オシエテヤル。オレノナハタイダ」

ジーク「鯛だかなんだかしらねえが、今すぐぶちのめしてやるぜ!」

急情「グフッフッフ。オマエラゴトキニ、オレハタオセナイ」

ジーク「上等だオラア!かかってこいや」

急情「ヤダネ」

ジーク「このやるー!」

レオン「ジーク、落ち着け!」

怠惰の挑発に乗り、真正面から向かっていくジーク。

ジーク「心配すんなって、こんなデカイだけの奴に負けるかよ」
怠惰「グフツフフ」

案の定ジークめがけ寝返りを打ち始めるが、今度は先ほどよりも数倍早くなっていた。

ジーク「ぐおおお、こんなの聞いてねえぞ！」

怠惰「グフツフフ」

なんとか盾で防ぐ事はできたが、押し潰されるのは時間の問題に見えたので、急いでレオンが助けに向かう。

レオン「リリイ、援護を頼む」

リリイ「まかせて！」

レオンは怠惰のもとに駆け寄ると、体を何度も何度も切りつけ、リリイは離れた場所からムチを打つ。

ザシユ！ザシユ！バチン！

怠惰「コレハタマラン」

ジーク「チャーンズ！」

二人の容赦ない攻撃に、怠惰が怯んで体を退かせると、その隙にジークがその場を離れる。

ジーク「いやあ、助かった」

怠惰「ブツブツシテヤルドオオオン！」

リリイ「また来ますわ!」
レオン「一旦逃げるぞ!」
ジーク「うえーい」

三人は全力で走り、心の扉へと引き返す。

ジーク「あいつは追いかけてこないみたいだな」

レオン「面倒なんだろう」

リリイ「それで、どうしますの?」

レオン「ロバート王は、心の剣でトドメを刺すと言っていたが、攻撃が効いているようには見えなかった」

ジーク「そうだなあ、グフグフ笑ってたしなあ」

レオン「どこかに弱点がないものか」

リリイ「そういえば、背中に宝石のようなモノがありましたわ」

レオン「背中か・・・」

ジーク「でもよー、あいつ寝てるから背中なんて攻撃できないぜ?」

レオン「俺に考えがある、ジーク耳を貸せ」

ジーク「ん?」

二人「ヒソヒソ」

ジーク「オーライ、任せときな」

レオン「リリイは離れた場所から敵を観察してくれ」

リリイ「わかりましたわ」

レオン「それじゃ、作戦開始だ」

ジーク「鎧は脱いでおくか」

レオンの突然の提案により、作戦を開始する事となった。

怠惰「ヌーン?オマエマタキタノカ?メンドクセーナア」

ジーク「そう言うなって、俺と遊ぼうぜ。それと槍は返してもらおうぞ」

先ほど投げて怠惰の体に突き刺さった槍を回収する。

ザシユ！ザシユ！

怠惰「イデエエエエエエ！」

ジーク「わりいく、抜こうと思ったたら刺しちゃった」

怠惰「グオオオオオオオオ！」

さすがに腹が立ったのか、高速寝返りを繰り返しながらジークに突進していく。

ジーク「へへへ、こっちだこっち」

鎧を脱いだジークは風のように早く、高速寝返りでも追いつく事はできなかった。

怠惰「サソツテオイテ、ニゲルノカ……。メンドクセエナ」

追いかけるのが面倒になってきたのか、怠惰が戻ろうとする。すると、再びジークが槍で突き刺す。

ザシユ！ザシユ！

怠惰「イデエエエエエエ！」

ジーク「へへへ、バーカ」

怠惰「クソガアアアアアア」

こんな事を何回か繰り返し、ようやくレオンに指定された場所に到着した。

すると、ジークは急に立ち止まり、振り返ったと思いきや、突進してくる怠惰の巨体を両手で受け止める。

怠惰「ナ、ナンダ!?!」

ジーク「ここまでの移動ご苦労さん」

怠惰「クソツ、ワナカ!ハヤクモドラネバ!」

動きを止められ、逃げようとする怠惰。

しかし、ジークの魔の手からは逃れられなかった。

ジーク「へっへっへっ、逃がさないぜええええ!」

逃げられないように、巨体を持ち上げ始める。

怠惰「ナンダトオオオン!?!」

ジーク「く、くっそあ。重いぜ・・・」

これだけの巨体を持ち上げるのは無理かと諦めそうになるジーク。その姿を見ていたリリイが、怒りの闘魂注入をする。

リリイ「ジーク!しっかりなさい!」

バチン!

ジーク「いつてええええええええええ!」

ムチで打たれた痛みを力にかえて一気に巨体を持ち上げると、怠惰の背中が上向きになりコアが露出する。

ジーク「レオン!やれえええええい!」

予めゴミ山に登って待機していたレオンは、ジークの合図と共に怠

情の背中に飛び移り、露出したコアに剣を突き立てる。

レオン「ハアッ!!」

ズシュッ!

怠惰「又ワアアアアアア!」

コアが破壊されると、怠惰の肉体は黒いモノとなり剣に吸い込まれる。

それと同時に、地震のような揺れが起こり始め、精神世界が崩壊していく。

リリィ「な、なんですの!?!」

レオン「マモノを倒した事で、奴の世界が崩れ始めたのだろう」

ジーク「そりゃやばいぜ、早く戻ろう」

精神世界の崩壊に巻き込まれないよう、急いで扉を目指す三人。途中で鎧を回収して、無事に現実世界へと生還する。

サンビーチ

レオン「元の世界に戻ったか」

ジーク「だあー! 疲れた」

リリィ「お風呂に入りたいですわ・・・」

おっさん「そろそろ目を開けていいかあ?」

ジーク「おう、いいぜ」

おっさん「それでえ、マモノつてのは倒せたのかあ?」

ジーク「おうよ、やる気出てきただろ?」

おっさん「そういえばあ、なんだか元気になったなあ」

レオン「(喋り方は変わってないな)」

ジーク「ハツハツハ、よかったよかった。これで一件落着だぜ」
おっさん「よし！元気が出てきた所で、三人にお礼をしよう」
ジーク「おおー！マジでえー!？」

おっさん「三人共、汚れてて臭いからなあ。おっさんのホテルに泊めてやるお」

ジーク「おっさん気が利くぜー」

リリイ「ホテルにはお風呂がありますの？」

おっさん「あるぞおあるぞお、でっかいのがあるぞお」

リリイ「まあ！素敵ですわ」

レオン「おっさんの厚意に甘えようか」

おっさんの厚意でサンシャイン最大のホテル、サンシャインホテルに泊めてもらえる事になった。

サンシャインホテル

おっさん「ここがおっさんのホテルだぞお」

ジーク「どひゃー！でっけー」

おっさん「そうだろおでっかいだろお」

従業員「社長！」

ホテルに入ると、従業員らしき男がおっさんのもとに駆け寄ってくる。

おっさん「やあやあ、仕事は頑張っているかあ？」

従業員「社長が全然出社なならないので、皆パニックですよ」

おっさん「そうかあ、それはすまなかつたなあ。でも、もう大丈夫だ」

おっさん「後ろにいる三人のおかげでな、すっかり元気だぞお」

従業員「それはよかった。皆様、社員一同に代わりお礼を申し上げます」

ます」

レオン「仕事でやったまでだ、気にする事は無い」

おっさん「それより君、彼等を泊めてあげるから、部屋に案内してあげなさい」

従業員「わかりました。皆様お部屋にご案内致します」

従業員に案内されて、それぞれの部屋に入る。

サンシャインホテル レオンの部屋

レオン「ふう、疲れたな……。そういえば、マモノを吸い込んでから剣の様子が変だな」

トントントントン！

レオンが考え込んでいると、誰かがドアをノックする。

レオン「開いてるよ」

ガチャ！

ジーク「レオン、風呂いこうぜ」

レオン「ああ、そうだな」

ジーク「リリイも誘うか」

二人は部屋を出て、隣のリリイの部屋と向かう。

サンシャインホテル

トントントン！

ジーク「リリィー、風呂いこうぜー」

ジーク「・・・」

レオン「寝てるんじゃないか？」

ジーク「いやいや、あんな汚れたまま寝ないだろ」

レオン「それじゃあ、お前に誘われるのが嫌とか」

ジーク「ありえるから困る」

トントントン！

レオン「リリィー、風呂に行かないか？」

レオン「・・・」

ジーク「こりやいないな」

レオン「そうだな、俺達だけで行くか」

二人だけで風呂に入る事にして浴場を探すが、一向に見つかる気配がなかった。

ジーク「このホテル広いな」

レオン「シュタイン城よりでかいかもな」

ジーク「ええい！諦めるものか！」

再び浴場を探し回っていると、前方からリリィが歩いてくる。

リリィ「あら？二人ともどうなさったの？」

ジーク「風呂探してんだよ」

リリィ「浴場なら屋上にありますわよ」

ジーク「なにー！？」

レオン「どうりで探しても見つからない訳だ」

ジーク「無駄にシヤレた事しやがってえ・・・」
リリイ「それじゃあ、わたくしは部屋に戻りますわね」
レオン「ああ、ありがとう」

リリイと別れ、屋上へと向かった。

サンシャインホテル 大浴場

屋上に着いた二人は、体を綺麗に洗って湯船に飛び込む。
バシャーン！

ジーク「うっひょー！気持ち良い」

レオン「生き返るな」

おっさん「やあやあ、二人とも」

ジーク「おっさんも風呂入ってたのか」

おっさん「折角、心が綺麗になったんだ、体も綺麗にしたいだろお？」

ジーク「そりゃそうだな」

レオン「そうだ、おっさん」

おっさん「なんだあ？」

レオン「この町で、他にマモノにとり憑かれている人間がいなか調べて貰えないか？」

おっさん「ああ、いいぞお」

レオン「すまないな」

レオン「（残りのマモノは11体、あんな奴がゴロゴロいるとなれば厄介だな・・・）」

ジーク「レオン、そんなしかめっつらでなに考えてんだ」

レオン「もうゴミ捨て場で戦うのは嫌だと思ってるな」

ジーク「ちげえねえな」

おっさん「さてさて、おっさんは先にあがるよ」

ジーク「あいよー」

レオン「俺たちはもう少し温まるか」

それから30分程、湯船に浸かり、十分に温まった所で風呂を出て部屋に戻る二人。

サンシャインホテル

ジーク「あゝ、のぼせたあゝ」

レオン「長く浸かりすぎたな・・・」

ジーク「そいじゃ、俺はもう寝る」

レオン「ああ、俺も寝るよ」

部屋に戻った二人は深い眠りについた。

サンシャインホテル レオンの部屋

そして翌朝。ドアのノック音で目が覚める。

トントントントントン！

レオン「んー・・・」

ジーク「入るぞ〜」

ガチャ！

ジーク「おっさんがごちそうしてくれるってよ〜」

レオン「ふわぁ〜、そうか」

ジーク「早く行こうぜー」

レオン「着替えるから先に行行っててくれ」

ジーク「オーライ、リリイに声かけてくる」

そう告げると部屋を出ていく。

サンシャインホテル

トントントン！

ジーク「リリイー、メシ食いにいこうぜー」

ジークの呼び声に反応してドアが開く。

ガチャ！

リリイ「朝から騒がしいですわね」

ジーク「おっさんがごちそうしてくれるんだぜ」

リリイ「それはいいけど、レオンは？」

ジーク「着替え中」

リリイ「ふう〜ん」

そこに着替えを終えたレオンがやってくる。

レオン「待たせたな」

リリイ「あら！わたくしが選んで差し上げた服をもつ着てらっしゃるのね」

レオン「昨日の戦闘で服が汚れてしまったからな」

リリイ「お似合いですわよ」

レオン「そりゃどうも」
ジーク「はやく行こうぜ」

三人揃った所で、1階のレストランへと向かう。

サンシャインホテル レストラン

ジーク「おっさーん！連れてきたぜ」
おっさん「やあやあ、用意ができてるよ」
レオン「ご馳走になります」
おっさん「おい、料理運んできて」

三人が席に着くと、料理が次々と運ばれてくる。

料理人「おまたせしやした」
ジーク「うひょー！うまそう」
料理人「フルコースとなっております」
おっさん「さあさあ、召し上がれ」

三人「いただきます」

レオン「この料理うまいな」
リリイ「ええ、本当においしいですわ」
ジーク「ふほひほっへはへっへひいはは」
レオン「飲み込んでから喋れ」
ジーク「ゴクン。少し持って帰っていいかな？」
おっさん「いいぞいいぞ、シェフ！お弁当作ってあげなさい」
料理人「へーい」

三人はお腹いっぱいご馳走になり、お弁当まで持たせてもらった。そして、おっさんとの別れの時はやってきた。

おっさん「レオン君、君に頼まれていた調査だが」

レオン「何かわかりましたか？」

おっさん「おっさん以外に、とり憑かれた人間はいなそうだよ」

レオン「そうですか・・・。お世話になりました」

ジーク「おっさん！弁当ありがとな！」

リリイ「今度はお父様も連れてきますわね」

おっさん「それじゃ、また遊びにおいで」

おっさんに挨拶を済ませた三人はホテルの外に出る。

サンシャイン

ジーク「んで、次はどこ行くんだ？」

リリイ「このまま先に進めば、港町ミウミウに着きますわ」

ジーク「うん、港にギャルはいなそうだな」

レオン「またおっさんと仲良くなればいいだろう」

ジーク「そうだな、そうするか」

こうして、サンシャインで怠惰を倒した一行は、港町ミウミウを指して出発するのであった。

第三話 完

人魚と海賊（前書き）

サンシャインを出発した三人は、港町ミウミウを目指して街道を歩いていた。

人魚と海賊

海沿いの街道

ジーク「ヒュー、暑いなあ」

レオン「だから鎧を脱げって」

ジーク「やーだー」

リリイ「どうしてそんなに鎧に執着してますの？」

ジーク「これにはふかあゝい訳があつてだな」

レオン「そうかそうか」

リリイ「レオンー、おんぶしてくださいさらない？」

レオン「断る」

リリイ「そんな事言わずにいゝ」

レオン「ジークにしてもらえ」

リリイ「いやですわ!」

ジーク「俺の話をきけえーい!」

レオン「また今度な」

ジーク「ぐぬぬ」

そんな話をしているとミウミウに到着する

ミウミウ

リリイ「ここが海の玄関と呼ばれている町ですわ」

レオン「すごい船の数だな」

ジーク「おい、アレ見てみるよ」

ジークが指差す方を見ると、網の中で泣いている人魚の少女が

いた。

リリィ「かわいいそうですわね」

ジーク「女の子を捕らえるなんて許せないぜ」

レオン「そうだな」

ジーク「待つてるよー！騎士が助けにいくぜー！」

人魚を助けに港の方へ走り出すジーク。

港

人魚「えーん、だしてよー」

漁師「ダメだダメだ。お前は高く売れそうだからな」

ジーク「おっさん！そこまでだ」

漁師「ぬっ！なんだ小僧」

ジーク「小僧じゃねえ、ジークニール様だ」

漁師「それで、俺になんの用だ？」

ジーク「人魚ちゃんがかわいそうだろ？逃がしてやれよ」

漁師「これは俺が捕まえたもんだ、どうしようが俺の勝手だろ？」

ジーク「それは違うな」

漁師「ぬわぁにい？」

ジーク「世界中の女の子は全て俺のモノだ」

レオン「それも違うだろ」

後から来た二人も話しに参加する。

漁師「なにを言うかと思えば・・・、仕事の邪魔だ！あっちいけ」

ジーク「いや、力づくでも助けてやるぜ！」

レオン「待てジーク」

ジーク「止めるなレオン！」

リリイ「珍しく真剣ですわね」

ジーク「ここであの子助ければ、俺に一目惚れするんだ！」

レオン「わかったから、話を聞け」

ジーク「ぬう・・・」

レオン「俺に試してみたい事がある」

リリイ「なんですか？」

レオン「見てのおたのしみだ」

レオンが意識を集中し始めると、心の剣から黒いモノが飛び出し、漁師の中に吸い込まれていく。

レオン「おっさん、人魚を売るなんて面倒じゃないか？」

漁師「なにいつてんだ？そんなわけ・・・、そんな・・・わけ・・・」

漁師「はあ・・・、だるいなあ」

レオン「人魚を俺にukれないか？」

漁師「そうだなあ・・・、でもなあ・・・、網から出すのめんどいなあ」

レオン「自分で出すよ」

漁師「そうかあ？ならくれてやるよあ」

レオン「遠慮なく頂くとしよう」

漁師「それじゃあ、俺は家に帰るよ・・・」

漁師は面倒臭そうにその場を離れていく。

ジーク「ヒュー、やったな」

リリイ「なにをなさったの？」

レオン「怠惰が持っていた負の感情を使って、無気力状態にした」

ジーク「なんも見えなかったぜ？」

レオン「心の扉と一緒に、所有者にしか見えないんだろう」

ジーク「折角だし、技に名前をつけようぜ？」

レオン「そうだな・・・、【脱力】とでも呼ぶか」
ジーク「普通だな」

人魚「おにいさん達ー！たすけてよー！」

レオン「すまん、忘れてた」

ジーク「よーし！今助けてやるぜ！」

ジークは槍を使って網を破り、人魚を海に放してあげた。
バシャーン！

人魚「ありがとー」

ジーク「じゃあ俺とデートしようぜ」

人魚「やだー」

レオン「フハハハ！人魚にもフラれたな」

ジーク「ちくしょおおお！！」

人魚「あはは」

ジーク「それじゃ、名前教えてくれよ」

人魚「マリンだよ」

ジーク「かわいい名前だな」

マリン「お兄さん達も教えてよー」

ジーク「知りたいか？」

レオン「俺はレオンハルト。その鎧男がジークニール」

リリイ「わたくしはリリイと申しますわ」

マリン「よろしくね」

ジーク「俺の出番が・・・」

レオン「マリン、聞きたい事があるんだが」

マリン「なーに？」

レオン「知り合いに、最近性格が変わった人はいないか？」

マリ「うーん、そういえばあゝ、アクマクアのお姫様が、最近怒りっぽくなってるらしいよ」

レオン「アクマクアとは？」

マリ「人魚の町だよ」

レオン「それは何処にあるんだ？」

マリ「海の中」

レオン「ふーむ、マモノの仕業かどうか調べようにも、海の中ではな・・・」

マリ「マモノってなーに？」

レオン「実はかくかくしかじかでな」

マリに事情を説明する。

マリ「ふくん、大変なんだね」

ジーク「そうなんだよ、大変なんだよ」

レオン「ここで足踏みしていても仕方ない、情報を集めに行くか」

リリ「そうですね」

ジーク「マリンまたなー」

三人がその場を離れようとすると、マリンが呼び止める。

マリ「みんな、まってよー」

ジーク「やっぱり、俺とデートしたくなかったか？」

マリ「ちがうよー。あたしも連れてって欲しいの」

ジーク「ん？どうしてだ？」

マリ「ここまで船で運ばれたから、アクマクアへの帰り道がわからなくて・・・」

リリ「それは大変ですわね」

レオン「連れて行くのは構わないが、そもそも陸を歩けるのか？」

マリ「うん！でも、砂浜みたいな場所がないと1人じゃ上がれな

いの」
ジーク「ほらよ、掴まりな」

海面にいるマリんに槍を差伸べて、掴まった所を引き上げる。

マリン「ありがとー」

ジーク「本当に歩けるのか？」

マリン「みてて！」

マリンが一生懸命歩いて見せるが、どう見ても跳ねているだけだった。

ジーク「前には進んでるけどな・・・」

レオン「フハハハ！面白いぞ」

マリン「こう見えても、海ですつと泳いでるから下半身は強いんだよ！」

ジーク「ほほう、なるほどな」

レオン「かなり目立つから、絶対に1人で行動したらダメだぞ？」

マリン「はい」

人魚の少女マリンを仲間に加え、一行は情報集めに戻るのがだった。

ミウミウ

レオン「さて、何処から手を付けるか」

ジーク「情報と言ったら酒場だな」

レオン「ジークにしてはまともな意見だ」

ジーク「俺だつてたまにはな？」

レオン「そうだな」

リリイ「港町ですから、1軒くらいはありそうですね」
マリ「れっつ〜」

レオン「まあそう慌てるな、あそこのご婦人に聞いてみよう」
ジーク「お前のナンパテクを見せてもらっぜ」

仲間が見守る中、女性に酒場の事を聞きに行くレオン。

レオン「その綺麗なご婦人」

おばさん「？」

レオン「今、魚をさばかれている貴方ですよ」

おばさん「あたしかい？」

レオン「そうです貴方です」

おばさん「綺麗だなんてやだねえ」

レオン「ハハハ、私は嘘がつけないもので」

ジーク「(今まさについてるな)」

おばさん「あたしに何の用だい？」

レオン「酒場が何処にあるかご存知ですか？」

おばさん「酒場なら旦那が知ってるから案内させるよ」

レオン「よろしいのですか？」

おばさん「どうせろくに仕事もしないで、ふらふらしてる宿六だからね。それくらい問題ないよ」

レオン「ありがとうございます」

そう言うと、おばさんは家に入り旦那を大声で呼ぶ。

おばさん「アンタアアア！！ちよつとこつち来な！！」

レオン「(すごい迫力だな)」

すると、家の中からマジでダメそうなおっさんが出てくる。

マダお「なんだよ母ちゃん」

おばさん「このお兄さんがね、酒場に行きたいそうなんだよ。あんな暇だろ？案内してあげな！」

マダお「めんどくさいなあ」

おばさん「あたしに殺されるか、酒場に行くかどっちか決めな」

マダお「わかったよ、行くよ」

マダお「そんじゃ兄さん、さっさと行こうか」

レオン「お願いします。おまえ達、行くぞ」

ジーク「おまえもなかなかやるな」

レオン「まあな」

リリィ「わたくしにも、あれくらい言って欲しいですわ」

レオン「その内な」

マダおに案内されて、酒場に到着する。

マダお「ここだよ」

レオン「ご苦労だった」

マダお「それじゃ俺は家に帰るよ」

ジーク「おっさんまたな」

マダおは家に帰り、一行は酒場に入る。

酒場

酒場に入ったみると、まだ昼という事もあり、客がおらず閑散としていた。

そんな中で、暇そうにしていたマスターから話を聞いてみる事にした。

マスター「ここは子供の来る所じゃないぞ？」

レオン「話だけでも聞かせてもらえないだろうか？」

マスター「話が聞きたいなら、注文しな」

レオン「それじゃあミルクを」

マスター「ほらよ」

レオン「リリイ、支払いを頼む」

リリイ「お任せください」

レオン「それじゃあ、話を聞かせてくれ」

マスター「何が聞きたい？」

レオン「この辺りで、最近性格が変わった人間を知らないか？」

マスター「また変な質問だな……。まあいい、漁師の男がナマケモノになっているらしいぞ」

レオン「それは知ってる」

マスター「俺が知っているのはそれくらいだ」

レオン「そうか・・・」

ジーク「どうするよ？」

リリイ「町で聞き込みしますの？」

レオン「つい先ほど起きた出来事を既に知っているようだから、このマスターの情報網は確かだ」

ジーク「そうだなあ」

レオン「そのマスターが知らないとなれば、この町には特に異変はないのだろう」

ジーク「そいじゃ次の町に行くか？」

レオン「そうだな」

話がまとまると、レオンはテーブルの上にあったミルクを飲み干す。

レオン「ゴクツゴクツ。マスターごちそうさん」
ジーク「よっしゃ行くか」

一行が酒場を出ようとすると、マスターが呼び止める。

マスター「お前達、この先の町に行くなら諦めた方がいい」

ジーク「なんでだ？」

マスター「橋が落とされているんだ」

ジーク「道は一本しかないのか？」

マスター「ああ、橋を通るしかないよ」

ジーク「オーライ、ありがとよ」

話が済んだので外に出る。

ミウミウ

ジーク「マスターの言った事が本当なら、これ以上進めないぜ」
レオン「かといって戻ろうにも、シュタイン兵が待ち伏せていそっ
だしな」

リリイ「困りましたわね」

マリリン「ねーねー、ふねにのろうよ」

レオン「そうか！その手があつたな」

ジーク「お手柄だぜ、マリリン」

マリリン「えへへ」

リリイ「それじゃあ、船着場を探しましょう」

船に乗るために、船着き場を探す四人。

しばらく海沿いを歩いていると、大型の船が停泊している棧橋を見
つける。

ジーク「見つかったな」

マリン「船がおっきーよ！」

ブオオオオオオオオオ！！

ジーク「うおっ！？」

レオン「まずいな」

四人が船を眺めていると、突然汽笛が鳴り始める。

リリイ「急がないと出航してしまいますわー！」

レオン「走るぞ！」

マリン「あたし走れないよー」

ジーク「しょうがねえな」

急いで船に向かう四人。しかし、マリンは走れないので、ジークが抱き抱えて走る。

四人が船の前に到着すると、渡しの前には船員が立っていた。

船員「君達、急がないと出航しちゃうよ」

レオン「リリイ、支払いを頼む」

リリイ「はい」

ジーク「はあ・・・はあ・・・、マリン・・・重いな・・・」

マリン「おもくないよー！」

船員「よーし、金はもらった。はやく乗りな」

金を支払い、急いで船に乗り込んでいく。

船員「出発」

四人が船に乗り込んだと同時に、渡しが外され船は出港する。

船上

ジーク「ぶはあく、間に合ったな」

マリク「ふねふねー」

レオン「勢いで乗り込んでしまったが、どこに向かっているんだ？」

リリイ「そういえば行き先を確認していませんでしたわね」

ジーク「まあいいじゃねえか。今は船旅を楽しもうぜ」

レオン「そうだな」

ジーク「なんか走ったら腹減ったな。おっさんから貰った弁当食おうぜ」

三人はビーチのおっさんから貰ったお弁当を食べ始める。

マリク「あたしもたべるー」

ジーク「はらよ」

マリク「もぐもぐ。おいしー」

レオン「あのホテルの料理は美味いよな」

リリイ「クインシーン城の料理よりも美味しいですわ」

ジーク「ふはひんほうおほうひお、ほんはひほいひふははっはひは」

レオン「飲み込んでから喋れ」

ジーク「ゴクン。シュタイン城の料理も、そんなに美味しくなかったしな」

レオン「野菜中心だったからな……。男には辛い町だ」

リリイ「だからわたくしと結婚してクインシーンの王になるべきですわ」

レオン「それは無理だ」

ジーク「そうだよなあ、封印を守らないといけないしな」

リリイ「それならわたくしが王妃になりますわ」

レオン「それも無理だ」

リリイ「むー！」

マリィ「ふたりは恋人なの？」

リリイ「許婚ですよ」

レオン「親が勝手に決めた事だ」

ジーク「そうだそうだ」

リリイ「お父様は関係ありませんわ。自分の意志で決めたのです」

レオン「俺も自分の意志で結婚は断る」

リリイ「そんな事言っていられるのも今の内ですわ」

レオン「なんだその自信・・・」

ジーク「いいよないよない、俺にもカワイイ恋人が現れないかな」

レオン「リリイをくれてやる」

ジーク「いらねー」

リリイ「失礼ですわね！」

そんな話をしながらお弁当を食べていると、辺りが急に騒がしくなる。

乗客「キャー！」

船員「なんだお前たちは!!」

ジーク「ん？なんか騒がしいな」

マリィ「おまつりー？」

レオン「それは違うと思うぞ」

リリイ「見に行きましょう」

四人は騒ぎの起きている場所へ向かってみると、そこには武装した女性が人質をとって何かを要求していた。

武装女「あたしらはミーノウ海賊団だ」

人質女「たすけて」

武装女「あんたら！早く食料を持ってきな！」

船員「そんな事、俺たちに決められる訳ないだろ」

武装女「じゃあ船長を呼びな！」

船員「ちよつと待ってる」

船長を呼びにその場を離れる船員。

ジーク「ヒュー、あの女できるぜ」

レオン「見ただけでわかるのか？」

ジーク「そりやな」

マリリン「ねーねー、あの人達なにやってるの？」

ジーク「ありや海賊つつてな、人を誘拐したり物盗んだりそりや

悪い奴らだ」

マリリン「こわーい」

レオン「しかし、海賊にしては数が少ないようだが」

ジーク「そういうやそうだな」

そうこうしていると、先ほどの船員が船長を連れて戻ってくる。

船長「わたしが船長です」

武装女「あんたが船長かい、うちの船にありつたけの食料を積み込みな！」

船長「うーむ、仕方ないな。野郎共！準備するぞ」

船員「へい！」

船長「少々お待ちを」
武装女「早くしなよ」

船長と船員達が、食料を運び出す準備の為に船内へと戻る。

ジーク「食料しか要求しないなんて変な海賊だな」

レオン「盗みにかわりはないだろう」

マリン「でもでも、悪そうな人には見えないよ？」

ジーク「俺も同感だ」

レオン「勘か？」

ジーク「いや、あんなカワイイ娘が悪い子な訳が無い」

レオン「・・・」

数分後。

ジーク「レオン、トイレ行きたいんだが」

レオン「勝手に行け」

ジーク「いやいや、場所がわからん」

レオン「船内を適当に探してれば見つかるだろう」

ジーク「手伝ってくれよ。な？な？」

レオン「わかったわかった」

トイレを探しに船内へ向かう二人。

船内

ジーク「やつべー、見つかんねえ」

船内をウロウロしていると、なにやら話し声が聞こえてくる。

レオン「シッ！静かにしろ」

ジーク「ん？」

レオン「話し声が聞こえる」

ジーク「こつちだな」

どうやら、話し声は貨物室の方から聞こえてくるようで、二人は盗み聞きを始める。

船長「あの女海賊め、ナメた事しやがって」

船員「お頭！爆弾の準備ができた！」

船長「よし、気づかれないように船に載せるんだぞ」

船員「アイアイサー」

船長「グフフ、これで奴らもおしまいよ」

船員が出口の方へ大きな荷物を運び始める。

ジーク「やべっ！こつちくるぞ」

レオン「この部屋に隠れるぞ」

二人はとっさに近くの部屋に隠れる。

ジーク「ふう〜、あぶなかった」

レオン「狭いな・・・」

ジーク「おおー！ここトイレじゃーん。ラッキー」

レオン「するなら俺が出てからにしろよ」

ジーク「わかってるって。つつか、あいつら爆弾って言ってたよな？」

レオン「ああ、言ってたな」

ジーク「やばいじゃーん。早くあの子に知らせてあげようぜ」

レオン「海賊を助けるのか？」

ジーク「そりゃ、海賊は悪い奴らだけだよ。なんにも殺すことないだろ？」

レオン「ふう……。俺が適当にやってみるから、お前はトイレを済ませておけよ」

ジーク「オツケーイ」

レオン「……。誰もいなそうだな」

レオンは外から物音がしない事を確認すると、トイレから飛び出し、武装女のもとへ走り出す。

船上

レオン「はあはあ……。爆弾はどこだ？」

リリイ「レオン、どうなさったの？」

レオン「実はな……。ごにょごにょ」

リリイ「それは大変ですわね」

レオン「荷物は既に運ばれてしまったか？」

リリイ「ええ、既に彼女達の船に」

レオン「仕方ないな」

レオンが武装女の前に飛び出していくと、武装女が警戒して呼び止める。

武装女「おい、おまえ！止まりな！」

レオン「話を聞いてくれ」

武装女「いいから戻りな！」

レオン「さっき、船員達が運び入れた荷物の中に爆弾が入ってるん

だ」

武装女「そんな嘘には騙されないよ」

レオン「俺が嘘をついてなんの得があるんだ？」

武装女「それは・・・」

レオン「それじゃあこうしよう。もしも爆弾が入ってなければ俺の命をくれてやる」

武装女「なっ!?!」

船長「コラ！勝手になにを言っているんだお前は!」

レオン「お前は黙っている」

意識を集中させると、船長に向かって脱力を放つ。

船長「はあゝ・・・」

レオン「早く決断しないと爆発するぞ？」

武装女「船に乗りな」

ジーク「俺もいくぜー」

トイレを済ませたジークが駆け寄ってくる。

武装女「何だお前は？」

ジーク「そいつの親友」

レオン「人畜無害な男だ、気にするな」

ジーク「そういう事」

武装女「まあいいさ、ついてきな。」

武装女に連れられて、人質と共に船に乗り込む二人。

武装女「マイコ！さっきの船員が持ってきた荷物を開けな」

マイコ「ほえ〜？後ろの二人だけ？」

武装女「気にするな」

マイコ「はい」

マイコと呼ばれる女性が荷物を開け始める。

マイコ「あけたよ〜」

武装女「爆弾なんて何処にあるんだい？」

レオン「荷物は一つなのか？」

マイコ「いんや〜、後二つあるよ」

レオン「そちらも調べたい」

マイコ「あいよ〜」

残りの箱を開けると、一番最後に積まれた箱の中から、大量の火薬と時限爆弾が見つかる。

武装女「ツチ、ナメたマネしてくれたね・・・」

レオン「これで信用してもらえたかな？」

武装女「ああ、疑って悪かったね」

マイコ「姉さん〜、これどうすんの？」

武装女「こんなでかいものを運ぶとなると厄介だね」

ジーク「ここは俺にまかせな」

軽々と片手で箱を持ち上げるジーク。

マイコ「うひゃ〜、すごいつすね」

武装女「なんて馬鹿力なんだい」

ジーク「そいじゃ捨ててくる」

ジークは箱を持って船の甲板に上がると、海に向かって投げ捨てる。

ザッバーン！

ジーク「あの箱には爆弾が入ってるぞー」

その言葉を聞いた乗客達が慌てふためき、その隙にレオンがリリイとマリンを呼び寄せる。

乗客「キヤーキヤー」

レオン「リリイー！マリン！こっちの船に乗れ！」

マリン「はい」

リリイ「マリン、転ばないように気をつけてね」
マリン「うん」

二人がレオンのもとに到着するやいなや、海に沈んでいた箱が大爆発を起こす。
ザッバーン！

マリン「あぶなかつたね」

レオン「そうだな」

リリイ「波がこちらにきますわ！」

武装女「お前達！早く船の中に入りな！」

言われるままに船の中に入ると、武装女がハッチを閉める。

潜水艇

全員が中に入ると、爆発の衝撃で起きた波で、船が大きく揺れ始める。

リリィ「キヤー」

レオン「抱きつくな」

ジーク「キヤー」

武装女「くつつくんじゃないよ!」

激しい揺れは次第におさまっていく。

ジーク「ヒュー、危なかったぜ」

マリィ「目がまわるう〜」

リリィ「気分が悪くなりましたわ・・・」

レオン「みんな無事そうだな」

武装女「あんた達、礼を言うよ」

ジーク「じゃあ俺とデートしようぜ」

武装女「断る」

ジーク「ぬ〜ん」

マイコ「あたしがデートしてあげよっか?」

ジーク「マジでー!?!」

マイコ「ウソぴよ〜ん」

ジーク「ぐぬぬ!」

レオン「ところで、人質が乗ったままだが」

武装女「この子はあたしの妹だよ」

人質女「ウフフ・・・」

レオン「なるほど、全部芝居か」

マイコ「そういう事っすね〜」

ジーク「ほら〜、やっぱり俺の言った通り悪い子じゃなかった」

レオン「疑って悪かったな」

人質女「ヒソヒソ・・・（姉さん、島に戻った方がいいんじゃない？）」

武装女「そうだね・・・。食料は十分手に入れたし、引き上げるか」
レオン「ついでに俺達も連れて行ってくれると助かる」

ジーク「完全に海賊の仲間って思われてそうだしな」

武装女「あんた達には世話になったからね、乗せていってやるよ」

マイコ「お話中の所悪いんですけど、あの船が大砲撃ってこようとしてるっす」

ジーク「なにー!？」

武装女「本性を現したね」

レオン「どういう事だ？」

武装女「話は後だよ。マイコ、潜水しな！」

マイコ「あいあいさー」

マイコが機械を操作すると、船が海に潜り始める。

マリン「みてみてー、海にもぐってるよー」

マイコ「ふふふ、これは海に潜れるスペシャルな船なんすよ」

ジーク「カッコイイな〜」

武装女「このまま潜行して、島まで行くよ」

マイコ「あいあいさー」

砲撃を避ける為に海に潜ると、島を目指して潜行を始める。

しばらくして落ち着いてきたので、レオンが話の続きを尋ねる。

レオン「先ほどの話の続きを教えてくださいませんか？」

武装女「あの船に乗っていた船員達はね、元は海賊だ」

ジーク「ふえ〜」

レオン「あの客船は改造されたモノなのか」

武装女「逆さ。海賊船を改造して客船っぽくしてるだけで、中身は海賊船のまんまだよ」

ジーク「そういや、トイレ探してる時に色んな部屋見たけどよ、客船にしては狭いし汚かったな」

レオン「奴らはなんで客船の真似事をしているんだ？」

武装女「乗客から預かった荷物から金品をくすねてるのさ」

ジーク「海賊にしてはせこいな」

武装女「今時、海賊なんてやってても稼げないからね」

ジーク「なのに、お前らはやってんのか？」

武装女「あたしらは金の為にやってる訳じゃないからね」

ジーク「ふえ〜」

マイコ「みなさん〜、そろそろ島に着くつすよ」

ジーク「やっと外の空気が吸えるぜー」

こうして、海賊達が根城にしている島へと上陸する事となった。

第四話 完

人魚と海賊（後書き）

z 携帯で見ている皆様、読み辛いと思いますが勘弁してくださいませor

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1780ba/>

心の在処

2012年1月6日01時49分発行